

現代の愛のかたち

——ロマンティック・ラヴ・イデオロギーはどこへ行ったか——

吉澤夏子

愛について、二つのことを言おうと思う。ひとつは、愛というものの本質について。そしてもうひとつは、現代の愛のかたちについて。

人が愛とは何かと問いかけるとき、誰もがその中核を成すと確信するものがある。それは時代や社会を超えて変わることのない、愛の普遍的なかたちである。しかしまた愛は人と人を結びつけるメディアとして、時代や社会によってたえずそのかたちを変えつづけてきた。近代社会の愛の制度として「近代家族」の成立を支えたロマンティック・ラヴ・イデオロギーは、すでにその役割を終えているといえるが、実は巧みにその姿を変え、現代に生き延びている。私たちは、愛の核心に何があると信じているのだろうか、そしていまどのような愛のかたちを紡ぎだし、享受しているのだろうか。

1 愛の核心

愛について語ることばは、この社会に溢れている。しかし、あのことばもこのことばも、そのほとんどが、愛というものの核心からはなにほどかずれているように感じられる。なぜだろうか。逆に考えてみる。そうしたことばのなかで、そうだがそれはなるほど真実かもしれない、と思わせるものは、おそらく何らかの意味で「愛の不可能性」に言及しているものだ。たとえば、愛は気づいたときにはすでに始まっている、あるいは愛は気づいたときにはすでに終わっている、とよくいわれる。

このことばの確からしきは、人々が、愛について語ろうとしても語るができない、語れば語るほど私の知っているあの愛からどんどん離れていくような気がする、語られたことばがなぜか嘘っぽく感じる、といった直感に裏打ちされている。私たちは、愛が生きられる現場に日々立ち会いながら、それを語ることばをもっていない。愛は生きられるほかないものだからだ。そして愛を語ることの不可能性は、愛それ自体の不可能性と、論理的には、一体である。なぜ愛は不可能だと感じられるのか、それは愛する他者の心をいかにしようにしても掴まえることができないからだ。愛の不可能性は他者を経験することの不可能性と相即している。

このことをまずルーマンの他者論を手がかりに考えてみよう¹⁾。私たちは日々他者とともに生きている、つまり不断に他者を経験している。しかしそれはルーマンによれば、とても「ありそうもない」ことである。私にとって他者とは絶対の差異であり、けっして到達できない。私とは私に相関して現われるすべての現象を包括する世界そのものであり、私に相関して現われる一つ一つの現象が、私ではないもう一つの場所へと相関して現われるとき、そこに現出している世界が他者そのものである。だから原理上私と他者はおたがいにけっして交わることのない彼岸に位置しているのである。

しかしそれにもかかわらず、私たちはつねにすでに他者とともに在る、その端的な事実はややうもない。他者を経験するというとうてい「あり

そうもない」ことが、いとも簡単に「ありそう
な」ことになっている。私が他者を経験するとい
うことは、「私と他者との共存」という事態であ
り、それはパラドクスにほかならない。この「私
と他者との共存」というパラドクスは、ルーマ
ンの場合、〈できごと〉において可能になっている。
〈できごと〉において私と他者は出会い、生き生
きとした現在を共有している。しかしその他者を
私はいかようにも掴まえることはできない。〈でき
ごと〉における他者は、この私から離れていく、
逃れていく、というかたちでしか捉えることがで
きない。つまり「離れていく」、「逃れていく」と
いう「動き」のなかで、はじめて私と他者は共存
することができるのである。

〈できごと〉の中で出会われる他者、この「動
き」の中でのみその姿を現わす他者と同じように、
この私も、そうした他者との関わりのなかではじ
めてその姿を現わす。つまり、そこでは、私と他
者は未分化で、いつでも交換可能なものとして現
われているのである。言い換えれば、〈できごと〉
において、私は私でありつつ同時に他者になっ
ている、ということである。つまりそこでは、他者
とともに、私という同一性が同時に構成されてい
るのである。そうだとすれば、他者を経験するこ
とは、私が私でなくなるかもしれない、そうい
うきわめて危うい局面を含んでいるといえる。だか
らこそ、〈できごと〉において可能になっ
てきたあからさまなパラドクスは、私たちの目
からは通常隠され、けっしてその姿を掴まえるこ
とはできないのである。

私の世界に現われる他者は、〈できごと〉にお
いて生き生きとした現在を共有していた他者では
もはやない。他者という絶対の差異は、私が私で
あるという同一性を獲得する過程で、たえずその
他者性を剥ぎとられ、相対的な差異へと移行する。
それは他者性を喪失した他者、いわば他者の痕
跡・記憶である。私と他者との関係は、私の世界
の中で他者を部分的に主題化することによって成
り立っている。たとえば、私たちにとって、ある

人は先生として、ある人は店員として、ある人は
通行人として現われる。私たちはその人たちの
「役割」と、部分的に社会的な関係を取り結んで
いる。彼らがどのようなことを考え感じているの
か、どのような人を気にかけているのか、など
「個人的なこと」にはあまり関心がない。たとえ
もっと重要な親密な他者、たとえば夫婦や親子や
恋人や友人との関係にしても、その他者の「個人
的なこと」をすべて知っているわけではない。

このように考えていくと、愛するということが
どんなに「特別なこと」なのかがわかる。誰かを
愛するということは、ある他者をそのまままご
と、全的に享受することである。他者をあくまで
他者として、その他者性を喪失することなく経験
することである。それはたとえば、愛する人のこ
とをすべて知りたい、愛する人がいまどこで何を
しているのか、どんな本を読み、どんな音楽を聴
いているのか、何を感じ何を考え何に感動してい
るのかを、すべて知りたいという切実な気持ちに
現われる。それは結局、「愛している／愛されて
いる」という事実を確認したい、という痛烈な欲
望にほかならない。

この事実は、しかし〈できごと〉の中にしかな
い。愛するということは、だから〈できごと〉に
おいて出会うあの他者、つまり「離れていく」
「逃れていく」というかたちでしかその姿を現わ
すことのない他者を、あくまで他者として、全面
的な肯定のもとに掴まえようとするのだ。しか
し、〈できごと〉は、生成し生成した途端に消え
去ってしまう。愛するということが〈できごと〉
の経験なら、この思いはけっして満たされること
はない。愛は、それが〈できごと〉の経験である
以上、必然的に挫折する。「愛している／愛され
ている」ことの確証は、どのようにしても手に入
れることはできない。だから愛は、すでに始まっ
たものとしてしか、あるいはすでに終わってしま
ったものとしてしか、把握することができない
のだ。

愛の核心には、だから何よりも他者の経験があ

る、といえる。あるいは愛が他者の経験の核心にある、といっても同じことだ。私たちは、通常他者との関係の中で特別なものが愛の関係だ、と考えている。しかしこの議論はおそらく転倒している。私たちは、飼い慣らされた他者たちとの関係を、他者の経験だと思っている。それが錯覚で、〈できごと〉の中で出会う他者が、まさに〈他者〉だとすれば、他者との関係は、つねにすでに、愛に満ち溢れた関係、愛の関係こそ他者との関係そのものだといえる。

このことは、真木悠介の「愛とエゴイズム」の議論と重なる²⁾。真木は自我の起原を探る旅を、人間という形態をとるはるか以前にまで遡って、始めた。そして、個体という存在の仕方が、さまざまな生成子たちの共生系であり、それがいくつもの段階を経て主体化していくことを確認した。そして私たちのよく知る自己という個体、自他の区別を当然のように生きることのできる私という存在ですら、なお、他者とともに在ること、他者とともに在って自己が自己でなくなることに、自己ではなく他者のためにこそ在ることに、喜びを感じるように、そのように構成されて在る、という結論をえる。ここにみいだされるのは、愛の至福の瞬間、至福の愛のかたちだ。

ルーマンの他者論と真木のこの議論から、愛についての重要なインプリケーションが導きだされる。それは、他者とともに在ることそれ自体に、愛の本質を見ているということ、さらにいえば、そこに人間が人間であることの意味をみいだしているということである。愛の核心は、他者を経験することの不可能性が可能性でもある瞬間、不可能性と可能性がせめぎあっている瞬間に生まれ、瞬間に消え去っていく〈できごと〉の体験にある。それは私と他者との共存、私が他者であり他者が私であるというパラドクスが可能になる瞬間である。この愛の至福、至福の愛は、変わりゆく時代や社会のうちにあって、なお私たちが変わらずに信じてきた、愛についての確かな何か、であることは疑いがない。愛の至福の経験、私が私であり

つつ他者でもあるという経験は、愛している／愛されていると確信する瞬間に生成され、瞬時に消え去るものである。この確信こそが愛である。それが至福であるのは、その一瞬が永遠だと感受されているからだ。それは、この一瞬が永遠につづく、と思うことでは、けっしてない。この一瞬が永遠だと感じられる、そう確信することが愛の経験なのである³⁾。

さらにこのことからもう一つ、愛について明らかになることがある。それは愛には根拠がない、ということである。愛している／愛されているという確信は、心の中＝内面にあるのだから、愛は愛によってしか根拠づけられない。愛は愛のためだけに存在する。

愛に根拠がないということ、つまり愛している／愛されているという確証を、どのようにしてもえられないということは、愛しあう二人の間にはつねに愛の過剰と欠如をめぐる闘争があることを意味する。「愛しあっている」のかどうかも最終的には確定できない。たとえばもし一方が他方を騙そうとしている、つまり愛していないのに愛しているふりをしていると仮定してみる。その「ふり」をそのとき「愛されている」と信じたことは、それが単なる「ふり」にすぎなかったあとでわかったとしても、事実としてけっして消えることはない。「ふり」にすぎなかったと「わかった」ということも、その「ふり」を「愛されている」と「信じた」ことも、心の中で起きていることで、ともに事実なのだ。つまり、「愛している」ということと「愛しているというふり」を区別できるのは、そう感じたり信じたりする当のその人だけなのである。だから愛には基本的に、「騙す／騙される」あるいは「加害者／被害者」という関係はありえない。「酷い目にあった」「騙された」という思いは、愛がすでに終わってしまったことに対する一つの合理的な解釈にすぎない⁴⁾。

たとえば「ある人が私をじっと見つめていた、それがとても嬉しくて幸せだった」というとき、ここには愛されていることの喜び、確かな愛の事

実が存在する。しかし、まったく同じ外形的なできごとが、正反対の事実を構成することもある。「ある人が私をじっと見つめていた、それがとても不快で嫌だった」、と。たとえある人が愛の表現として見つめるという行動をとっていたとしても、私はそれを愛だとは感じない、あるいは逆に、見つめるという行動がどれほど欺瞞的な愛の表現だったとしても、それを私は愛だと感じることもある。不快で嫌だった、あるいは嬉しくて幸せだった、というそのときのその「思い」だけが、事実なのである。

2 愛の幻想

愛の核心には、私が私でありつつ他者でもある、という至福の瞬間がある。それは生成し生成したとたんに消滅する、〈できごと〉の体験である。しかし近代以降、この一瞬が永遠につづく（はずだ）という幻想を、現実であるかのように信憑させる社会的装置が生まれる。それが、ロマンティック・ラヴ・イデオロギーである。それによって、男性と女性は、ある日運命的に出会って恋に落ち、一生の伴侶として愛しい子どもをもうけ家族を成す、それが「普通」であるという考え方が、広く社会に浸透した。こうして至福の愛の瞬間は、「ロマンティック・ラヴ」として、「特別な人」との恋愛-結婚という形態において成就され、永遠の愛へと繋ぎ止められたのである。しかし当然ここには欺瞞がある。一瞬でしかないものが、永遠であるはずはないからである。

ロマンティック・ラヴ・イデオロギーの欺瞞は、パッションネイト・ラヴ（情熱としての愛）からロマンティック・ラヴへの移行の中に生み出された。パッションネイト・ラヴとは、ひと言でいえば、愛の核心にある「私と他者との共存」という〈できごと〉への情熱（＝欲望）そのものである。愛する人のすべてを知りたいという思い、それはしかしけっして満たされることはなく、ときに暴走し破滅へと向かい、ときに不安と絶望の淵に沈む。

私が私でありつつ他者でもあるという歓喜は、私が私でなくなるかもしれないという苦悩と表裏一体である。そこには究極的に狂気へと繋がるような情熱の過剰がある。ロマンティック・ラヴ・イデオロギーは、この過剰ゆえに、ある特権的な人々だけしか享受しえなかった（恋）愛を、誰でも経験できるものにした。制御不能なパッションネイト・ラヴは飼い慣らされ、すべての人が従うべき規範としての愛＝ロマンティック・ラヴとなったのである。まさに「愛の民主化」（ルーマン）である。

パッションネイト・ラヴの核心にある情熱の過剰という狂気は、こうして換骨奪胎されロマンティック・ラヴとなった。結婚への序章として位置づけられたロマンティック・ラヴは、人々の性愛行動を「正しく」規定する規範としての愛となった。それは、恋愛-結婚に結実する愛だけが正しく（正統）、それ以外の愛は間違っている（逸脱）と規定する。ロマンティック・ラヴ・イデオロギーにおいて、至福の愛の瞬間は、永遠につづくことが約束される。しかし現実には、それはただ生きられ、生きられたと思った瞬間すでに消えている。永遠の愛は、したがって厳密に言えば、至福の愛が頹落し変質した、欺瞞の愛ということになる。以下では、一瞬が永遠だと感じられる、〈できごと〉としての愛、本来の至福の愛に対して、ロマンティック・ラヴ・イデオロギーにおける、永遠へと凝固された至福の愛を「至福の愛」と表示する。

この「至福の愛」に対して、「性の政治」という考え方を対峙させたのが、ラディカル・フェミニズムである。ラディカル・フェミニズムは、「個人的なことは政治的」というテーゼのもと、愛の関係であるはずの性関係（性的行為）がそれ自体、実は、差別の関係にほかならない、と主張した。差別とは、ある人がある人を、劣ったもの汚れたもの取るに足らないものとして認知し扱うという、その視線、態度の中にこそある。そうした究極の差別が、もっとも個人的・私秘的な愛の

関係において行なわれているという。ラディカル・フェミニストたちは、他者とともに在ることが、つまり他者との関係が、支配と服従というもっとも権力的=差別的な関係となる(である)という悲惨に目を向け、愛の関係の欺瞞性を明るみに出したのである。

しかし愛の関係は差別の関係でもある、つまり「至福の愛」は欺瞞の愛にすぎないという、ラディカル・フェミニストたちが発見した事実は、単に、愛に根拠はないという事実を示しているにすぎない。「男性と女性の性関係はすべて性差別である」という主張には何も根拠はない。誰もその正しさを論証することはできない。しかし逆に、そうした一見荒唐無稽でどうも受け入れがたい主張をすることによって、「男性と女性は愛しあうがゆえに性的行為を行なう」という私たちが素朴に信じて疑わなかった常識にも実は何の根拠もない、という事実を浮き彫りにしたのである。

愛に根拠はない、愛は空虚である。だからそれは「至福の愛」にも欺瞞の愛にもなる、ということだ。愛には何ひとつ実質とよべるようなものはない。その空虚は、ある時は愛の至福に満ち溢れ、またある時は愛の欺瞞に占拠される、ただそれだけのことだ。ドウォーキンは、『欲望という名の電車』のステラとスタンレーの間で成立する「殴打と性交のドラマ」を欺瞞に満ちた愛の関係だとみなした。しかしステラとスタンレーにとって、それはごく普通の夫婦の間にみいだされる愛の証にはほかならない。そこに在る外形的にはまったく同じ事柄が、コインの裏表のように、まったく違った装いで現われるのだ⁵⁾。

愛について語るができないのは、愛には根拠がないからである。フーコーはプラトンの『饗宴』から次のような言葉を引いている。「そのこと(求愛者の想いを受け入れること)には、絶対的なものは何もない。そのことは、それ自体では、べつに美しくも醜くもないのであって、それが美しくなされるときには美しい、反対に、醜くなされれば醜いのである」⁶⁾。この言葉は、愛の無根

拠性をあますところなく伝え、鮮烈だ。おそらく、愛についての真実のすべてがここにあり、そしてここにしかないといえるだろう。

「そのこと」すなわち「求愛者の想いを受け入れること」とはどういうことか。プラトンの時代ではなく、フーコーの時代(近代以降)に即して考えれば、それは端的に、愛されていると信じることで、である。では、それ自体では美しくも醜くもないそのことが「美しくなされる」、あるいは「醜くなされる」とはどういうことか。

愛されていると信じることに、根拠はない、つまりそのことに「絶対的なことは何もない」。ラディカル・フェミニズムは、それは醜くなされるほかはないと信じ、求愛者の想いを愛の欺瞞として、すべて拒むべきだと主張した。ロマンティック・ラブ・イデオロギーは、それが美しくなされることを信じ、求愛者の想いを愛の至福として、すべて受け入れよと命じた。欺瞞の愛も「至福の愛」も、まったく同じ外形的な事柄に対応している。その事柄の核心には、「愛されている(いない)と信じること」がある。そう信じることには根拠がないから、それは欺瞞にも「至福」にもなる、ということである。だとすれば、どちらにしても、根拠なく「そう信じている」ことにおいては「同じ」だということになる。ロマンティック・ラブ・イデオロギーが「イデオロギー」(=根拠なき信念)にすぎないことをラディカル・フェミニズムが暴露した、しかしそのラディカル・フェミニズムの主張にも実は何の根拠もなかった、ということである。ここには、同じ事柄についての異なる解釈(=信念)が対峙している。

信念と信念の対峙という意味では、ロマンティック・ラブ・イデオロギーとラディカル・フェミニズムは同じ平面に立っている。しかしこの両者の主張から導きだされるインプリケーションには大きな違いがある。それは「内面」=「心の自由な空間」についての位置づけである。この違いはきわめて重要である。

内面は近代になって発見されたといわれる。た

例えば、近代家族は「情緒的絆を基盤にした、性別役割分業のシステム」と定義されるが、ここでいう「情緒的絆」の中核に位置するのが、すでに述べたように、ロマンティック・ラブである。近代以前の家族は、外在的な理由、つまり「家」を守り家督を継ぐ子どもをもうけるため、働き手を増やすため、人間関係を円滑にするため、といった経済的・制度的理由によって形成されていた。しかし近代以降、家族を成す契機は、より内在的な要因（情緒ということばで表される個人的な感情）へと収斂している。人は、そうしなければならないからではなく、そうしたいから、そうするようになった。つまり端的に「好きだから」結婚するようになったのである。それは、私たちが内面をもつ自由な主体として「愛の関係」を選択するようになったということである。ロマンティック・ラブはそもそもそうした内面にのみ根拠をもつ。家族をその典型とする「個人的なものの領域」＝「親密な領域」を形成する端緒は、「好き」「愛している」という情緒にあり、そこにしかない。それは、心の中にだけあるもので、きわめて曖昧で不確かなもの、検証不可能で儂いものである。しかしまた逆にそうであるがゆえに、それは「好きなものは好き」（誰にも反論できない）という意味で、揺るぎない確信に満ちた絶対的なものなのである。

ロマンティック・ラブは、内面を、すなわち「好き」「愛している」という気持ちを素朴に前提にするとともに成立する。ラディカル・フェミニズムは、そのナイーブさに冷水を浴びせ、愛の無根拠性を暴露した。しかしそれは同時に、「個人的なものの領域」＝「親密な領域」を形成する最初の端緒である内面を否定したということを意味する。ラディカル・フェミニズムの思想は、究極的には、個人的な「心の自由な空間」を破壊する。このことがもたらす帰結は、深刻である。なぜなら、もし「心の自由な空間」がなければ、主体的な選択ということに、何の意味もなくなるからだ。ラディカル・フェミニズムは、「個人的なことは

政治的」というテーゼに端的に表れているように、「好き」「愛している」といったもっとも私密的・個人的な事柄まで、支配-服従という政治的な関係に絡めとられている、と主張した。親密な関係性も、自らの責任において自由に選びとったものではなく、社会的な強制の結果だということになる。ロマンティック・ラブという紐帯は、「選択という名の強制」によって結びあわされているのであり、それがなければあつという間に雲散霧消してしまう。ラディカル・フェミニズムの主張を敷衍すれば、そういうことになる。

ラディカル・フェミニズム、そして、そのコインの裏表であるロマンティック・ラブ・イデオロギーは、「そのこと」＝「愛されている（いない）と信じること」を、疑いえない絶対的な公理とした。その点は同じである。では何が違うのか。以下この点を明らかにしよう。

ロマンティック・ラブ・イデオロギーは内面をただ素朴に前提にしたために、ラディカル・フェミニズムに足を掬われた。好きな人を自由に選んで、その人と親密な関係を結びたいという欲求にもとづいて恋愛をしているのに、あるいは結婚をして家族をつくっているのに、それは選択ではない、と言われてしまうのなら、いったいどうすれば選択したことになるのか、それがまさに問題だということになる。言い換えれば、「個人的なものの領域」の端緒としての「内面」を保持しつつ、それを自由な選択の結果としてどのように確保できるか、ということである。

ここでフーコーの言葉にもどってみよう。「求愛者の想いを受け入れること」は、美しくなされるときには美しく、醜くなされるときには醜い。それは、どのようなときに「美しくなされたこと」になるのか。フーコーが問題にしていたのは、成人男性と若者という男性同士の愛の実践において、若者がいかに主体的でありうるか、ということである。社会的な権力関係において圧倒的に不利な立場にある若者が、恋される者として、成人男性の求愛をどのように受け入れれば、彼は、男

性として自由民として（将来の）支配する者として、主体的であるとみなされるのか。彼は、恋する成人男性の求愛をただ単に「受け入れる」わけにはいかない。それは、権力関係に沿って支配者の意のままになること、受動的な従属者になることを意味する。ロマンティック・ラヴ・イデオロギーにおける愛の関係が差別の関係でもあるのは、「求愛者の想いを受け入れること」が愛である、という単純な等式の無謬性を、何の疑いもなく前提にしているからだ。しかしまたただ単純に求愛を拒めばいい、というわけでもない。それは、愛の関係そのものの、つまりコミュニケーションそれ自体の拒絶を意味する。それは結局、ラディカル・フェミニズムがそうであるように、個人的なこと＝内面の否定へと向かう。どちらにしても、そこに選択の余地はなく、「それ」は醜くなされている、ということになる。

フーコーによれば、成人男性と若者の愛の実践において重要なことは、それが「美しい」形式を保持していること、そしてそのために二人とも「自己統御」の能力を確保する必要があることだ、という。何が美しい形式か、その客観的な基準や具体的な論拠についてはいっさい示されていない。ただ以上のことから、愛の実践は、それが主体的に、つまり自由に選択されたとき、美しくなされたことになる、ということは明らかだ。そのために、恋される若者は、ただ「受け入れる」のでもただ「拒む」のでもない、いわば受け入れつつ拒み、拒みつつ受け入れる、そういう生の技法を身につけなければならなかった。そうした両義的な生の在り方だけが、美しい愛の実践を可能にする。

つまり主体的であるかどうか、「それ」が美しくなされるかどうかは、何を拒み何を受け入れるかを決定し実践する自由（な選択の可能性）にかかっている⁷⁾。何を拒み何を受け入れれば美しい形式が保持されるかは、明らかにされていない、といった。逆にいえば、何を拒み何を受け入れるかがまったく空白であるというところに自由がある、ということだ。自由とは内面という「心の自

由な空間」そのものにほかならない。だから、その空白がはじめから「至福の愛」に満たされているとき、そこに自由はなく、「それ」は醜くなされる（欺瞞の愛である）ほかないのである。このようにロマンティック・ラヴ・イデオロギーの「至福の愛」とラディカル・フェミニズムの欺瞞の愛は正確に同じ事態を指示していることになる。

しかしそれでもなお、ここには決定的な違いがある、といわざるをえない。ここで、愛の核心に何があったか、を思い起こそう。そこには、「私と他者との共存」という事態、愛している／愛されていると確信する至福の瞬間がある。それは一瞬に過ぎ去り、けっして止めておくことができない、〈できごと〉としての愛である。したがって、すでに述べたように、愛の可能性は同時に不可能性である。この両義性こそが、愛の本質である。ロマンティック・ラヴ・イデオロギーは、一瞬を永遠に止めておこうとした。そこに誤謬があった。制度としての愛には、パッションネイト・ラヴだけに還元することのできないさまざまな夾雑物が混じり込む⁸⁾。ラディカル・フェミニズムは、そこに欺瞞の愛を嗅ぎつけた。しかしそれでも、ロマンティック・ラヴ・イデオロギーは、その愛の核心に位置する至福の愛の瞬間から出発している。この点（だけ）がきわめて重要である。愛の核心にあるその両義性をそのまま確保し、内面という「心の自由な空間」をけっして否定することはなかった。ほとんど不可能な「性愛の可能性」をそのままにしておく、つまりその僅かな（おそらくあるかないかわからない、いやほとんどない）可能性を残しておく、そういう選択をしたのである。しかしラディカル・フェミニズムはそれを否定し破壊した。内面という「心の自由な空間」がないところに、自由に選択された愛の関係はない。「それが美しくなされる」可能性ははじめから排除されているのである。

3 愛の変容

近代の愛の規範として君臨してきたロマンティック・ラブ・イデオロギーは、いまこの現代社会において、私たちの性愛行動をどのようなかたちで規定しているのだろうか。

厳密な意味でのロマンティック・ラブ・イデオロギーは確実に衰退している（ほぼ消滅している）といていい、まずこの点を確認しておこう。それは、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの「定義」から明らかだ。ロマンティック・ラブ・イデオロギーとは、婚姻における愛と性の一致を唯一の正しい性行動である、と説く。そのもっとも重要な意義は、性を愛という名のもとに婚姻に封じ込めるといふ点にある。それによって、婚姻以前、婚姻以外、婚姻以後の性行動がすべて道徳・倫理に反する、間違っただ、悪い、逸脱したものとして位置づけられることになる。未婚のときは純潔主義によって若い男女の性行動は厳しく制限される。結婚すれば貞操の観念によって浮気・不倫は悪として社会的に糾弾される。そして死別によって婚姻関係が消滅したあとまで、女性は（「未亡人」、「貞女は二夫にまみえず」という言葉に象徴されるように）伴侶に「操を立てる」ことが暗に求められる。

しかし現代社会において、こうした規範は正義として通用しているといえるだろうか。処女、婚前交渉などという言葉はほとんど死語と化しているし、浮気や不倫のハードルは女性においてもかなり低くなっている。そして死別にしろ離別にしろ、その後の恋愛・再婚が道徳的に非難されることなどもはやまったく考えられない。ロマンティック・ラブ・イデオロギーの意味するものを厳密に婚姻における愛と性の一致だと理解するならば、その規範は、いまや人々の性行動を、いかなる意味でも縛ってはいない⁹⁾。その限りで、ロマンティック・ラブ・イデオロギーは、確実に衰退（あるいは消滅）しているといえるのである。

しかし一方で私たちは、現代社会においてロマ

ンティック・ラブ・イデオロギーはむしろ強化されているのではないかと、といった印象ももつ。90年代以降、小説、映画、ドラマ、コミックなどで、「純愛」ブームは繰り返し起き、人々の心を捉えている。「純愛」とは、一生に一度の究極の恋愛を指し示す言葉であり、まさにロマンティック・ラブ・イデオロギーの核心に位置するものである。

こうした相反する（ように見える）二つの現象をどのように解釈すればよいのか。

まずいえることは、現代社会では、ロマンティック・ラブ・イデオロギーが愛と性と婚姻の一致を導く「性規範」としてではなく、純愛を究極の愛のかたちとする「観念」としてのみ、強固に生き延びているのではないかと、ということである。それはどういうことか。かつてロマンティック・ラブ・イデオロギーは、ひとつの「理想」として、現実には人々の性行動を規定していた。しかし現代社会では、ロマンティック・ラブという観念が純化され、それに殉じる二人の関係がひとつの「虚構」として理想化されている、つまり、「純愛」はあくまで虚構の世界の中で完結し意味をもっているのであって、現実の世界では人々の性行動にほとんど影響を及ぼしていない、ということだ。

いまや恋愛は、誰でもいつでもできる、きわめて日常的な経験である（と思われている）。だからこそ、「ほんとう」の恋愛＝純愛が切実に希求されるのだ。人々は、純愛に憧れ「一度でいいからあんな恋がしたい」と思う。しかしそう思ったからといって、一生に一度の特別な人を待ちつづけて誰ともセックスしないわけではない。その純愛への憧れ、それを求めて止まない気持ちは、虚構の中に在り、現実には、結婚に至ることのない恋愛を普通に楽しんでいるのである。

ロマンティック・ラブ・イデオロギーが機能していたときは、結婚しなければセックスはできない（愛と性と婚姻の一致）わけだから、また結婚し妻となり母となることが女性の幸せ、結婚して男は一人前という「近代家族」にまつわる神話も

強固に信じられていたために、人々は、内在的理由（好きだから、この人と一緒にいたいから・・・）と外在的理由（家督を継ぐため、親がうるさいから、結婚するのが当たり前だから・・・）を何とか調停し、結婚をしたのである。

現代社会では、人を結婚へと駆り立てる外在的理由はほとんど希薄になっている。内在的理由によってのみ、つまり個人の自由な選択の結果として、結婚するようになった。つまり「愛しているがゆえに結婚する」というロマンティック・ラヴ・イデオロギーの根底にある原則が、ますます純化されているのである。しかしここにはある根本的な問題がある。それはもともとロマンティック・ラヴ・イデオロギーが内包していた矛盾である。

まず「愛しているがゆえに結婚する」というとき、愛しているということを婚姻以前にどうやって確認すればよいのか、という問題がある。愛と性と婚姻の三位一体が唯一正しい性行動だとすれば、愛していないのに結婚するわけにはいかない、したがって愛しあっていることを婚姻以前に確認しなければならない、しかし婚姻以前にセックスすることは禁じられている・・・、ではいったいどうやって愛しあっていることを確認すればよいのか、ということである。しかしロマンティック・ラヴ・イデオロギーが内包していた矛盾は実はこれだけではない。

現代社会では、ロマンティック・ラヴ・イデオロギーは、「婚姻における愛と性の一致」から、「婚姻における」という限定を外し、愛と性の一致＝「愛しているがゆえにセックスする」というかたちに姿を変えていると考えられる。ここでは、愛は性によって確認できることになっている。したがって「愛しているがゆえに結婚する」という原則に含まれていた矛盾は解消した（というより、矛盾そのものが消滅した）。愛は、婚姻に関係なく、性によって確認すればよい、ということになったのだから。愛と性の一致とは、愛しあっている二人がセックスをするのは当然だ、二人が

セックスするのは愛しあっているからにほかならない、ということの意味するからだ。それは「近代社会」の自明の前提である。しかしほんとうに、愛は性によって確認できるのだろうか。この問いは、もう一つの、より根源的な矛盾をただちに顕在化させる。「婚姻において」という限定が外されたことによって、もともとロマンティック・ラヴ・イデオロギーに内包されていたこの矛盾が、より尖鋭なかたちで露呈されることになったのである。

この矛盾は、いうまでもなく近代社会が個人の内面＝心を自明の前提として編成されている、ということに起因するものだ。すでに述べたように、愛が内面にのみ根拠をもつということは、愛には何の根拠もないということである。そもそも愛は何によっても確認することはできないのだ。それは愛のあるセックスと愛のないセックスを区別できない、ということの意味する。ラディカル・フェミニズムが暴きたてた愛の無根拠性は、結婚の制度性だけではなく、あらゆる性愛行為の欺瞞性を明るみに出すことができる。性によって愛を確認することはできない、セックスしたからといってそこに愛があるとは限らない、そんなことは誰でもが知っていることである。

ロマンティック・ラヴ・イデオロギーが衰退・消滅していくなかで、愛の無根拠性はますますその姿を露わにしていく。こうした状況の中で、では愛を何によって確認すればよいのか、と考えたとき、その一つの答えとして、（きわめて逆説的ではあるが）「結婚」による純愛の成就、という選択肢が浮上してくる。ロマンティック・ラヴ・イデオロギーが機能不全に陥っているいま、セックスを含む恋愛は、結婚へといたる一生に一度のイベントではない。それは人生を彩るさまざまなエピソードの一つにすぎない。普通に真剣な恋から、ゲーム的な軽い恋愛、そして性の商品化の局面にいたるまで、セックスや恋愛のチャンスは、いくらでも転がっている。だからこそ、そうしたさまざまな恋愛のなかで、もし結婚にいたる恋愛

があるとするれば、それはやはり特別ということになる。結婚がいまや内在的な理由のみによる選択の結果としてあるものなら、結婚してもしなくてもどちらでもいいのに、あえて結婚するということが、それはそうしたいからそうするということにはかならず、純度100%の「気持ち」の表れとして解釈できる。それこそが愛しているということの証左になる。あの女（男）でもなく、この女（男）でもなく、あなたと結婚したというこの事実こそあなたを一番愛しているということの証しだ、というわけだ。外形的には、ロマンティック・ラブ・イデオロギーにおける恋愛-結婚とまったく同じである。ただ結婚前の恋愛が一つではなく、さまざまな恋愛のうちの一つが結婚にいたるということにすぎない¹⁰⁾。

現代社会では、ロマンティック・ラブ・イデオロギーは一方で確実に衰退・消滅へと向かっている、しかし他方では純化・尖鋭化しているように見える。この一見相反する二つの現象の共存は、現代社会において、「虚構」のもつ意味・想像力の重要性が増大しているということと密接に関連している。いまや現実と虚構は、それぞれ独自の空間として成立・完結し、どちらかがどちらかの支配下に置かれるということはない。かつてはおたくに固有だと思われていたそうした世界観を、いまや多くの人々が共有するようになった¹¹⁾。現実には、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの「神話」性は弱まり、人々の行動を直接規定する規範としての強制力は確実に衰えている。その一方で、ロマンティック・ラブは純愛という観念として、虚構の世界の中で、生き生きと人々の想像力を掻き立てている。

ロマンティック・ラブ・イデオロギーの衰退・消滅という事態は、一見「虚構」の弱体化を意味しているように見える。「神話」とは虚構であり、誰も神話を信じなくなったということは、虚構のもつ意味が薄れているのではないか、というわけだ。しかし事態は逆である。ロマンティック・ラブ・イデオロギーが機能しているということは、

虚構を現実だと、端的に信じているということである。それが機能しなくなったとき、虚構は崩れ、現実の至高性が前面化する。しかし今起きていることは、虚構が崩れたことを知って、なおその虚構を虚構のまま止めておこうとすることである。現実とは別の、もう一つの現実を虚構として構築すること、ここに必要なのは高度の想像力である。

たとえば、現代の若い女性たちの間では新・専業主婦志向が高まっている、といわれる。しかしそれはけっして従来の意味での、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの復活を意味しない。もはや誰もその「神話」をそのまま信じてはいない。だからこそ、かつてのように、女性たちがみんないっせいに「専業主婦」になる、といった画一的な人生を歩むようなことはなくなったのだ。いま女性たちの前には、「仕事（キャリア志向）」、「結婚と子ども（新・専業主婦志向）」、「仕事と結婚（DINKS）」、「仕事と結婚と子ども」「仕事と子ども」など、さまざまな人生の選択肢が開かれている。その中から、あえて「専業主婦」を選ぶということは、「専業主婦になることが私の幸福である」という神話を「虚構」と知りつつ選んでいる、それを虚構としてたえず構築しつつ、また虚構と知りつつ、それでもなお（それだからこそ）その虚構に自らのアイデンティティを賭ける生き方を選択する、ということの意味しているのである。女性にとって、「専業主婦」というたった一つの選択肢ではなく、こうした複数の生き方のモデルが呈示されているという状況が、まさにロマンティック・ラブ・イデオロギーの衰退・消滅という事態を示すものである。どのような「愛のかたち」であっても、もはやそれを無条件に（正しい幸福の）現実だと信じさせてくれるような強力な神話は存在しない。こうした選択肢の何を選んだとしても、何らかの「虚構」を構築しそれに殉じている、という意味では同じである。しかしそれでも、その中でも、「ロマンティック・ラブ」は、虚構を虚構として成立させる観念として機能し、このような多極化の一つの極をかたちづくって

るのである。

どのようなかたちにせよ、なぜ、ロマンティック・ラブ＝純愛は、現代社会においていまなお人々の心を捉えるのか。最後にこれだけは言うておこう。それは、ひと言でいえば、愛の核心に位置する、他者の経験の唯一の可能性（＝不可能性）は、パッションイト・ラブ（＝恋）という経験にあり、それはやはりきわめて稀なえがたい経験、めったに遭遇することのない経験である（と了解されている）からだ。そのことが、恋愛から結婚へとという唯一の道筋に投影され、ロマンティック・ラブとして純化される¹²⁾。しかし他方で、現実には、セックスを含む恋愛経験はゲームのような感覚で手軽に享受できるものとして遍在している。それは愛のあるセックスと愛のないセックスが究極的に区別できないということの、両極端の反映でもある。この二つが区別できない以上、「愛ゆえのセックス」（＝愛と性的一致）というロマンティック・ラブ・イデオロギーの前提は空虚なものにすぎない。内面＝心を否定しないということは、それを不可知の領域として前提としたうえで、なおそれを「信じる」ということを意味している。それが空虚であることを知りつつ、なおそれを「信じる」ということがなければ、人はけっして、愛している／愛されているという確信（心という内面）にのみ根拠をもつ「愛の経験」へと至ることはできないのである。

注

- 1) ルーマンの他者論と「愛の関係」についての詳細は、吉澤（2002）を参照。
- 2) 真木悠介（1993=2004）を参照。「われわれの経験することのできる生の歓喜は、性であれ、子供の「かわいさ」であれ、花の彩色、森の喧噪に包囲されてあることであり、いつも他者から〈作用されてあること〉の歓びである。つまり何ほどかは主体でなくなり、何ほどかは自己でなくなることであり」（真木 [1993=2004: 145]）。
- 3) ルーマンは〈できごと〉Ereignisを「システムの要素」として位置づけている。システムと要素は相互に依存し同時に生成されるものであり、〈できごと〉はそのつどの世界の全体連関を貫いている。ルーマンにおいて世界はつねにすでに生成して在るものにほかならず、〈できごと〉において一瞬は永遠でもある。したがって〈できごと〉としての愛の経験は一瞬を永遠だと感受することである、という解釈はこうした議論ときわめて整合的である（吉澤 [2009] 参照）。
- 4) 「酷い目にあった」「騙された」という「思い」もまた、その時点でそう思う人にとって紛れもない事実である。しかしその事実も、愛している／愛されていると確信したその時点での「愛の経験」の事実性をいささかも減じることはない。それは、内面＝心の領域が不可知であることに起因する必然的な帰結である。
- 5) A.Dworkin（1987: 42=1989: 78）。ラディカル・フェミニズムの思想の重要性和限界については、吉澤（1993）を参照。
- 6) M.フーコー（1986: 264）。フーコーが着目したのは、成人男性と若者という男性同士の愛の実践において、恋される者（若者）が、いかにして主体でありうるか、という問題、支配するはずの者（男性であり、いずれ市民になる者）が支配される者（恋される者）になるという二律背反をいかに克服できるか、という問題であった。この議論は、現代社会においてもなお「女性は主体でありうるか」という問いを問うことの重要性を喚起させる。この論点については、吉澤（2004）を参照。
- 7) 自由な選択の主体は、行為主体性の感覚に由来する。自由は、「他でもありえた」選択の決定において、この私がいま確かにこれを選択している、と確信することのうちにあり。私たちはつねに自らを自由であるとみなしうる。自由と主体性については、吉澤（2012）を参照。
- 8) アーレントは公的領域と私的領域を厳しく峻別した。そして「私的なものの領域にのみ生存することのできる非常に重要なもの」（アーレント [1994: 77]）として愛を挙げている。愛は私的領

域にのみ属するものであり、いかなる意味においても公的なものではない。したがって「制度としての愛」ということは自体が矛盾に満ちている。むしろ「制度としての愛」それ自体が、パッション・ラブにはけっして還元できない「夾雑物」そのものだといえる。

- 9) 「いかなる意味でも」とは言い過ぎではないか、という反論がありうるだろう。後に述べるように、虚構の世界における「純愛」志向が、僅かでも未婚化・晩婚化の遠因となっているとすれば、それはロマンティック・ラブ・イデオロギーが現実に機能している証左ではないのか、と。しかし、虚構が現実と拮抗するリアリティをもっているとしたら、虚構を端的に現実だと信じていることと、虚構を虚構と知りつつそれを信じていることとは、まったく違うことである。したがって、新・専業主婦志向と同様、「純愛」志向によって未婚化・晩婚化が助長されているとしても、それはもはや(伝統的な意味での)ロマンティック・ラブ・イデオロギーが機能していることにはならない。
- 10) こうした状況が、現代社会において深刻な社会問題となっている晩婚化・未婚化の一つの原因だといえるだろう。純愛を貫き、恋愛=結婚においてその愛を成就させる、それが理想の「結婚」だとすれば、そうした結婚ができないのならば何も無理して結婚することはない、ということになる。だからそうした結婚相手=「運命の人」が現れるまで、結婚は結果として引き延ばされる。
- 11) たとえば、おたくの存在が、もはや突出した理解不能な異様な人々だとはみなされなくなっているという事実が、その一つの証左となるだろう。おたくの裾野はどんどん拡大し、誰もが多かれ少なかれその要素をもっているとさえいえるようになった。そのことが意味するのは、多くの人々にとって、虚構は現実と同等の(あるいはそれ以上の)重みをもつようになった、ということである。
- 12) 人気漫画『BAKUMAN』(原作:大場つぐみ、漫画:小畑健、集英社)に描かれている「恋愛」に、この「ロマンティック・ラブ」が極限まで純化さ

れたかたちを見ることができる。それは現実にはほとんどありえない「恋愛」である。物語自体は、14歳の二人の男の子、真城最高と高木秋人がメインキャラクターで、二人が漫画家になる夢を実現していく青春サクセスストーリーが中心である。最高は中学を卒業する時、きっと両思いだよと秋人に励まされ、密かに思いを寄せていた同級生亜豆真保の家を訪ね、告白する。そこで最高は思いがけず亜豆にプロポーズし、成り行きで次のような「約束」をすることになる。それは、二人の夢——最高と秋人の漫画がアニメ化され、亜豆がそのヒロインの声優になる——がかなったら結婚する、それまでは会わずにお互いメールで励まし合う、というものだ。実際にはさまざまな事件が起き、図らずも何回か会うことにはなるのだが、この「約束」は大学生になっても守られ、二人の「恋愛」は、お互いの夢がかなって改めて最高が亜豆にプロポーズする二十代半ばまでつづいたのである。秋人のほうは、同級生の見吉という女の子と「普通」に恋愛を楽しんで早々と結婚してしまうが、この二つの「恋愛」エピソードが、メインの物語の背景として描かれ、重要なアクセントとなっている。あり得ない「純愛」とごく普通の恋愛の共存、その対照は、ここで論じてきたロマンティック・ラブ・イデオロギーをめぐる二つの現象——「純愛」志向と恋愛の日常化——に重なるものであり、現代若者たちの恋愛事情が反映されているようで、興味深い。

文献

- Arendt, Hannah, 1994 *The Human Condition* Chicago University Press 1958 = 志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫
- Dworkin, Andrea 1987 *Intercourse*, The Free Press = 1989 寺沢みづほ訳『インターコース——性的行為の政治学』青土社
- フーコー, M. 1986 渡辺守章訳『性の歴史——知への意志』新潮社
- 1987 田村俣訳『性の歴史——快樂の活用』

新潮社

- 1987 田村俣訳『性の歴史——自己への配慮』新潮社
- Giddens, A., 1992 *The Transformation of Intimacy: Sexuality, love & Eroticism in Modern societies*, Polity Press (= ギデنز『親密性の変容』(松尾精文・松川昭子訳) 而立書房)
- 橋爪大三郎 1995『性愛論』岩波書店
- Luhmann, N. 1982 *Liebe als Passion: Zur Codierung von Intimität*, Suhrkamp (= 2005、佐藤勉・村中知子訳『情熱としての愛——親密さのコード化』木鐸社)
- 1984 *Soziale Systeme*, Suhrkamp (= 1993 / 1995、佐藤勉監訳『社会システム論(上)(下)』恒星社厚生閣)
- Kneer, G & Nassehi, A. 1993 *Niklas Luhmanns Theorie Soziale Systeme*, Wilhelm Fink Verlag (1995、館野受男・池田貞夫・野崎和義訳『ルーマン社会システム論』新泉社)
- 真木悠介 2001『自我の起源 愛とエゴイズムの動物社会学』岩波書店
- 大澤真幸 1996『性愛と資本主義』青土社
- 吉澤夏子 1993『フェミニズムの困難 どういう社会が平等な社会か』勁草書房
- 1997『女であることの希望 ラディカル・フェミニズムの向こう側』勁草書房
- 2000『性のダブル・スタンダードをめぐる葛藤 『平凡』における〈若者〉のセクシュアリティ』『近代日本文化論8女の文化』岩波書店
- 2002『世界の儂さの社会学 シュッツからルーマンへ』勁草書房
- 2004『「個人的なもの」と平等をめぐる問い』熊野純彦・吉澤夏子編『差異のエチカ』ナカニシヤ出版
- 2012『「個人的なもの」と想像力』勁草書房

